

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 6 日現在

機関番号：17401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870484

研究課題名(和文)日本語教育用辞書作成に向けた「外来語の文法」の記述的研究

研究課題名(英文)A Descriptive Study of Loanwords in Japanese from a Grammatical Perspective:
Towards a Loanword Dictionary for Japanese Language Learners

研究代表者

茂木 俊伸(MOGI, Toshinobu)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：20392540

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本課題では、現代日本語の外来語の記述的研究を行うとともに、日本語教育分野への応用を前提とした分析のモデル構築を行った。

主たる成果として、意味と形式の対応を重視する「外来語の文法」という視点から、外来語が文中で共起する名詞や動詞のタイプ、ヴォイスやアスペクト等の述語要素、現れる構文タイプや従属節のタイプといった分析の観点を示したことが挙げられる。また、外来語の意味・用法に関する文献目録を作成・公開した。

研究成果の概要(英文)：This project studied loanwords in modern Japanese from a grammatical perspective.

The most significant accomplishment of this project lies in its presentation of new perspectives for analyzing loanwords: (1) the kind of noun, verb, and adjective the loanword in a sentence cooccurs with, (2) the kind of predicate elements, such as voice and aspect, the loanword cooccurs with, and (3) the kind of subordinate clause the loanword appears in.

In addition, this project created and publicly released a bibliography of research papers on the meaning and usage of loanwords in modern Japanese.

研究分野：日本語学

キーワード：外来語 カタカナ語 語種 コーパス コロケーション 文型 文献目録

1. 研究開始当初の背景

現代日本語の外来語研究においては、既に日本語に定着した基本的な外来語に関する分析が十分になされていないという問題点が指摘されてきた。

語彙研究における外来語の取り扱いは、その受容史や新語・専門語の問題が中心となっており、次のような、現代日本語における外来語の具体的な実態に関する研究は、未だまとまった形では行われていない。

- ・(個々の) 外来語の意味・用法記述や、類義の和語・漢語との使い分けに関する分析
[外来語の意味的側面]
- ・(個々の) 外来語がどのような文法的性質を獲得しているかの分析
[外来語の文法的側面]

一方、日本語教育の分野では、外来語(カタカナ語)が日本語学習上の困難点になっているにもかかわらず、十分な手当てがなされていない、という問題点が繰り返し指摘されている。

実際、多くの日本語教材における外来語の説明は、例文や辞書の意味(別語への言い換え)の提示にとどまっており、学習者や教師向けの文型辞典・コロケーション辞典においても、外来語の取り扱いや情報量がきわめて少ない。

このような問題の一因は、外来語に関する基礎研究の不足により、日本語教育分野に提供可能な情報の蓄積がないことにあると考えられる。

つまり、上記の2つの問題点は、根を同じくするものであると言える。

2. 研究の目的

以上のような現状を打破するために、本課題では、

- 1) 現代日本語の外来語の意味・文法に関する記述的研究を行い、事例研究から体系的な分析への道筋をつけること。とりわけ、意味と文法の対応関係を明らかにすること。

そしてそのうえで、

- 2) 記述的研究の成果から、日本語教育分野に応用できる有益かつ必要な情報を検討すること。

を研究課題として設定した。

これらの課題は、長期的には、具体的な資料(日本語学習者向けの「外来語文型辞典」や「外来語ハンドブック」として結実させる必要があるが、本研究が3年間で目指すのは、上記1)においていくつかの外来語の事例

研究を行い、その体系化の可能性を示すこと、および上記2)において、1)の成果を日本語教育に応用するための枠組み(どのような文法的特徴を、どのような形で記述すればよいか)を検討することである。

研究代表者は過去に、大規模コーパスに現れる外来語サ変動詞の調査と、事例研究として動詞「カットする」の分析を行い、次のことを明らかにした(MOGI, Toshinobu (2012) *Towards the Lexicographic Description of the Grammatical Behaviour of Japanese Loanwords: A Case Study. Acta Linguistica Asiatica 2(2)*)。

- ・書き言葉コーパスに高頻度で現れる外来語と、日本語教育分野の先行研究で指摘される「基本外来語」がほぼ一致する。
- ・コーパスの使用により、辞書類では分からない意味・用法の詳細な記述や、頻度による重みづけができる。
- ・語義によって共起する成分や文末形式が異なることがあるため、外来語における「意味と形式の対応関係」を見ていく必要がある。

この結果を受けて、本研究において具体的に設定した研究サブテーマは、次の3点である(上述の課題1)と2)のうち、1)が[A][B]に、2)が[C]に対応する)。

- [A] 基本的な外来語の意味・用法に関する詳細な記述(大規模コーパスに基づく記述的研究)
- [B] 外来語の文法的・構文的側面の重点的記述(「外来語の文法」研究の構築)
- [C] 日本語教育に有益な意味・文法情報の探索と検討(日本語学習者用の「外来語文型辞典」に向けた検討)

なお、個々の外来語の記述的研究そのものは、それほど難易度が高いものではない。したがって、本研究が外来語の分析と応用の一つのモデルを示すことで、外来語研究が活性化することが期待される。

本課題によって、さまざまな立場から外来語研究の成果を共有していくことができるような基盤を構築することが大きな目標となる。

3. 研究の方法

上記のサブテーマ[A]は包括的なものであるが、国立国語研究所が構築した約1億語規模の大規模コーパス『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を用いてデータを収集し、基本的な外来語の意味・用法の記述を行った。

従来の国語辞書とカタカナ語辞典の語釈を整理し、コーパスにおける言語使用の実態と比較するとともに、さらなる意味・用法の

記述の深化を図った。

サブテーマ[B]は[A]の重点領域を示したもので、BCCWJを用いた記述的研究において、文中で外来語とともに現れる語に注目する文法的アプローチを採用した分析を行った。とりわけ、外来語サ変動詞と外来語名詞に注目し、

- (i) 外来語動詞の構文的研究
- (ii) 外来語名詞のコロケーション研究

を行った。

(i)の外来語動詞の分析では、基本語と考えられる外来語サ変動詞について、コーパスにおける使用実態に基づいた意味・用法の記述を行い、意味ごとの共起成分（格成分や副詞的成分）、文末形式といった形式面を詳細に分析するというアプローチを採用した。

(ii)の名詞の分析は、過去に行った「コストが高い」のような程度を表す外来語名詞と形容詞述語とのコロケーション研究（茂木俊伸（2012）「文法的視点からみた外来語 外来語の品詞性とコロケーション」『外来語研究の新展開』、おうふう）をふまえ、外来語名詞と述語との共起においてどのような記述が可能であるかの探索的研究を行った。

最後のサブテーマ[C]では、まず、既存の日本語教材、辞典類から、これらの資料がどのような外来語の意味・文法的情報を掲載しているのかを調査した。さらに、サブテーマ[A][B]の成果を踏まえ、「コーパスから得られた外来語の特徴のうち、どのような意味・文法的情報が日本語教育において有益なものと言えるか」という情報の整理・選択について検討を行った。

4. 研究成果

先に「2. 研究の目的」において示したサブテーマ[A][B]に関しては、まず、「3. 研究の方法」の(i)の外来語動詞の分析として、基本語と考えられ、かつ多義的な外来語動詞を収集・選定した。そのうえで事例研究として、外来語サ変動詞「マークする」を中心とした分析を行った。

多義動詞「マークする」の分析においては、まず、辞書の記述を参考にしながら、コーパスにおける使用実態に基づいた意味・用法の分類を提示した。さらに、それぞれの語義ごとの共起成分（格成分や副詞的成分）、文末形式（ヴォイス、アスペクト、授受補助動詞など）といった形式面を詳細に分析し、語義ごとの構文パターンを明らかにした。

ここでもやはり、語義によって構文パターンが異なるという意味と形式の一定の対応関係が見られたことから、このような対応関係を整理していくことが、日本語教育への応用という観点からも、「文の形」から「語の意味」を推測する手がかりの情報となる（理解の側面）と同時に、「語の意味」から「文

の形」を推測する手がかりとなる（産出の側面）という点で有益であると言える。

さらに、漢語サ変動詞「記録する」との相違点についても分析し、「マークする」に「人間の力で努力した結果、顕著な数値や事実を生じさせる」という意味が内包されていることを明らかにした。このような意味が、漢語とのすみ分け関係において、後発の外来語の存在価値の一つになっていると考えられる。

なお、「マークする」以外にもいくつかの多義的なサ変動詞について予備的な調査・分析を行ったが、そのうち「ヒットする」の分析については、その概略を高校生向けの研究紹介としてまとめた（茂木俊伸（2015）「使える」けれど「不思議」な日本語』『2016年度文学部案内』、p.48、熊本大学文学部）。

一方、「3. 研究の方法」の(ii)の外来語名詞のコロケーション研究においては、まず、(i)のサ変動詞「マークする」の分析に並行する形で、「マークをつける」のようないわゆる機能動詞結合の分析を行い、「マーク」と共起する動詞のリストを示すとともに、「マークする」と「マークをつける」が同義になる場合とそうでない場合があることを示した。

次に、抽象的な意味を持つ外来語名詞「ピーク」について分析を行った。「ピーク」の分析においては、この語がよく現れる構文タイプ（動詞述語文、コピュラ文、「～をピークに」句）およびこの語が構成するコロケーションを示した。

「ピーク」のコロケーション分析としては、「[名詞]{の/が/は/も}ピーク」という連鎖における名詞のタイプの分析から、大きく分けて「量」のピークと「質」のピークが表現されていること、共起する動詞のタイプの分析から、頂点への推移と到達、通過という局面が存在することを明らかにした。「～をピークに」句の分析では、「～」部分に《時点》を現す名詞がよく現れること、句全体が《低下・現象》を表す動詞と共起しやすいことを示した。

サブテーマ[C]に関しては、日本語学習者向けの辞典や教材において記述されている外来語の意味・形式に関する情報が、語義、品詞、動詞の自他だけでなく、近年では構文タイプやコロケーションにも及んでいることが調査によって分かった。さらにコーパスを使った検証によって、これらの形式に関する情報や例文の選択が、実態に沿った妥当なものであることが示された。

これらの分析を踏まえ、上述の研究成果から日本語学習者向けの情報として最も有効活用できると思われるのは、

- ・意味タイプを付与した名詞や動詞のリスト、共起する副詞的成分のような、より豊かなコロケーション情報
- ・構文タイプや文末形式といった広義のコロケーション情報

である。語義ごとにこれらの形式に関わる情報を示しておくことは、特に産出の側面において有益であると考えられる。

また、均衡コーパスの利用により、それぞれの語が高頻度で現れる資料タイプ(レジスター)の情報も得られており、これもまた教育上の情報として必要なものであると考えられる。

以上、本課題は、日本語学・日本語教育の両分野において要請されてきた外来語に関する問題の解決を図ることを目的として行われたものであり、特に日本語教育への応用を前提としたこと、および「外来語の文法」という観点を提起し、語彙論・文法的な記述だけでなく、応用に向けた分析のモデル構築を行ったことが、最大の特色である。

なお、本課題の副産物と言えるもう一つの成果として、「外来語の意味・用法に関する文献目録」を作成し、2014年9月にウェブ上で公開した。

これは、本課題の遂行にあたり収集した文献のうち、現代日本語の外来語の意味・用法を扱ったものを整理し、語別に目録化したものである。2016年3月の本課題終了時点の目録では、217の外来語の意味・用法に関する計118編の文献情報を掲載することができた。これは、今後の外来語研究の基盤となるものと評価できる。

さらに、文献目録の作成時に蓄積したノウハウを含めて学生用チュートリアル資料としてまとめた「日本語文法研究のための文献探索—データベース検索から論文公開まで—」もウェブ上で公開している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

茂木俊伸(2016)「外来語は文の中でどのように使われるのか」『日本語学』35(7), 明治書院。(査読無) 掲載決定

茂木俊伸(2015)「外来語「ピーク」の文型とコロケーション」『語文と教育』29, pp.55-45(左64-74), 鳴門教育大学国語教育学会。(査読無)

茂木俊伸(2015)「コーパスを用いた「外来語の文法」研究—外来語の文型とコロケーション—」『筑紫日本語研究 2014』, pp.85-93, 筑紫日本語研究会。(査読無)

茂木俊伸(2015)「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析—「マークする」を例として—」『文学部論叢』106, pp.83-95,

熊本大学文学部。(査読無)

<URL>

<http://reposit.lib.kumamoto-u.ac.jp/handle/2298/32406>

〔学会発表〕(計6件)

茂木俊伸「コーパスを用いた「外来語の文法」研究—外来語の文型とコロケーション—」,第259回筑紫日本語研究会,2015年3月30日,於:熊本大学(熊本県熊本市)

茂木俊伸「外来語は文の中でどのように使われるのか—「外来語の文法」研究の事例から—」,2014年度熊本国語国文学会,2014年12月13日,於:熊本大学(熊本県熊本市)

茂木俊伸「日本語文法研究のための文献探索—データベース検索から論文公開まで—」,日本語文法学会第15回大会チュートリアル,2014年11月23日,於:大阪大学豊中キャンパス(大阪府豊中市)

茂木俊伸「外来語研究の展開と応用」,平成26年度日本語教育学会第7回研究会(四国地区)招待講演,2014年11月8日,於:鳴門教育大学(徳島県鳴門市)

茂木俊伸「「外来語の文法」研究とその応用」,第10回筑波大学応用言語学研究会招待講演,2013年9月28日,於:筑波大学(茨城県つくば市)

茂木俊伸「コーパスを用いた外来語サ変動詞の分析—「マークする」を例として—」,第4回コーパス日本語学ワークショップポスター発表,2013年9月5日,於:国立国語研究所(東京都立川市)

〔その他〕

・文献目録

「外来語の意味・用法に関する文献目録」
<URL>

http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/literature/asia/nihonbungaku/tmogi/lw_biblio/index.html

・資料

「日本語文法研究のための文献探索—データベース検索から論文公開まで—」

<URL>

<http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/literature/asia/nihonbungaku/tmogi/sjg2014tutorial.html>

6 . 研究組織

(1) 研究代表者

茂木 俊伸 (MOGI Toshinobu)
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：20392540

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし